平成 28 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科　修士論文

男子高校生のジェンダー・スポーツへの参加要因

学籍番号　4115028

氏　名　　野川　暁弘

論文指導教員　工藤　康宏

研究指導教員　工藤　康宏

合格年月日　平成 29 年　2 月 20 日

論文審査員 主査 小笠原悦子

副査 木藤友規

副査 工藤康宏

目次

第１章　序論 **1**

第１節　緒言 1

第２節　研究の目的 2

第３節　用語の定義 2

第２章　先行研究の検討 **3**

第１節　スポーツとジェンダーに関する研究 3

第２節　スポーツの社会化に関する研究 3

第３節　男子新体操に関する研究 8

第４節　結果の予測 10

第３章　研究方法 **11**

第１節　研究対象 11

第２節 調査方法 11

第３節 調査項目 12

第４節　調査手順 12

第５節　分析方法 15

第４章　結果 **16**

第１節　サンプルの属性 16

第２節　スポーツ参加歴について 18

第３節　社会化環境について 20

第４節　スポーツ参加に最も影響力のあった他者について 22

第５節　各種目を本格的に始めた理由について 24

第６節　各種目の魅力について 25

第７節　ジェンダー・スポーツにおけるスポーツキャリア分析 26

第５章　考察 **27**

第６章　結論 **29**

文献一覧 **30**

ABSTRACT 33
資料 35

第１章　序論

第１節　緒言

近年、ジェンダーの垣根が低くなり、これまで男性スポーツと見なされてきたボクシングやラグビー、柔道、サッカー等の近代スポーツへの女性の参加の増加は目覚ましいものがある[1)]。スポーツ種目にはボクシングやラグビーなどの「男らしい」スポーツと新体操、チアリーディングやシンクロナイズドスイミングなどの「女らしい」スポーツがあり[1)]、これらをジェンダー・スポーツと称することができるであろう。これらのジェンダー・スポーツに参加する者は、スポーツ・マイノリティと呼ばれる少数派であり、時に Tomboy/Sissy と呼ばれ揶揄される傾向にある。

ジェンダーという概念が生まれたのは、1970 年代のフェミニズム運動からである[2)]。それ以降、性差をめぐる議論はセクシズムとジェンダーとを区別し、性差は宿命として変えられないものではなく、「女性らしさ」に縛られない女性の生き方が可能であると宣言したことが始まりである[3)]。現在では、ジェンダーの概念も「単なる性別としてのジェンダー」、「社会的性別・性質としてのジェンダー」、「規範および参照枠組みとしてのジェンダー」など多様になっているが、このような一連のジェンダー・フェミニズム研究の進展と共に、社会全体における女性の社会的地位も向上してきた。また、ジェンダーの概念は、これまで不可能であると思われていた女性の可能性を押し広げる存在であるといえる[3)]。フェミニズムが提唱され始めて以後、女性学の発展などもあり、女性差別の問題を最重要問題として捉えられ、これらの解消に向かって努力されてきた。

社会学では、ジェンダーがもたらす差別や抑圧を片方の性からだけでなく、より一般的な視点から捉える必要があるとしている[4)]。このことから、男性もまたジェンダー・マイノリティの対象と捉えることも重要な問題であるとしている。近代スポーツは「男らしさ」の象徴的な文化として男性によって推進されてきた[2)]が、フェミニズムが提唱され始めて以降、様々な要因により女性による近代スポーツへの参加が増加した。日本においても女性に主眼を当てた女性スポーツの文献、女性スポーツとジェンダーに関する研究は「スポーツとジェンダー」伊藤[5)]，をはじめ、飯田[6)]や井谷[7)]らによって研究が進められてきた。一方で、男性をジェンダー・マイノリティとして捉えた社会化研究は日本では極めて少ないのが現状である。

例えば、海外における優れた研究として、女性的スポーツ（新体操）に参加する若い

男性の両親や家族とのコミュニケーションや関係など男性的なアイデンティティの構築に関する研究 Caroline[8]や、ジェンダーステレオタイプにおける児童期のスポーツ参加決定要素に関する研究 Tuero[9]などがある。しかし、日本において男性をスポーツ・マイノリティと捉えた社会化研究は極めて少ない。したがって、ジェンダー・マイノリティに関する基礎資料の収集と実態の把握が必要であると考えられる。

第２節　研究の目的

本研究は、男性をジェンダー・マイノリティとして捉え、ジェンダー・スポーツに参加している男性に関する基礎資料の収集とジェンダー・スポーツに参加している男子高校生の実態を把握し、男子高校生のジェンダー・スポーツ参加過程と参加に至る要因について明らかにすることを目的とした。

第３節　用語の定義

第1項　ジェンダー・スポーツ

伊藤[10]や井谷[11]、飯田[12]などの社会学研究では、「スポーツとジェンダー」や「スポーツにおけるジェンダー」など、スポーツの場におけるジェンダーは男性視点から女性に関する表記が多く、人それぞれ異なった表記をしている。そのため、本研究では、女性らしいスポーツをジェンダー・スポーツと定義する。

第２項 ジェンダー・マイノリティ

井谷[11]によれば、女性がラグビーやサッカーなどの男性的と捉えられやすいスポーツをするとジェンダー・マイノリティと捉えられてきたと報告している。反対に、本研究では男性が新体操やエアロビック、シンクロナイズドスイミングのような女性的なスポーツを行っている集団の少数派をジェンダー・マイノリティと定義する。

第２章　先行研究の検討

本研究は、男性をジェンダー・マイノリティとして捉え、ジェンダー・スポーツに参加している男性に関する基礎資料の収集とジェンダー・スポーツに参加している男子高校生の実態を把握し、男子高校生のジェンダー・スポーツ参加過程と参加に至る要因について明らかにすることであった。本章ではこれまでに行われてきたスポーツの社会化に関する先行研究を中心に概観する。

第１節　スポーツとジェンダーに関する研究

ジェンダーに関する研究は1970年代に起きたフェミニズム運動以降、盛んに行われてきた。日本では、伊藤[5]をはじめ、1990年代から、井谷[13]、飯田[14]、谷口[15]らによって研究が進められてきた。これまでに飯田ら[14]によってスポーツにおける女性の地位を数量的に表す試みがなされてきた。『スポーツ・ジェンダー学の招待』では、スポーツ報道が男性プロスポーツに偏り、レポーターや解説者も男性によって占められていることなどが飯田[16]によって明らかにされた。また、佐野[17]は子供の遊びに関する考察から、生まれた時から男女で異なる環境や期待を与えられた子供達が成長と共にジェンダーを内面化していくことなどを明らかにしたことなどが報告されている。

また、吉川[18]は男性のジェンダー・アイデンティティの形成について、近代以降の社会では、スポーツが男性のジェンダー・アイデンティティ形成に大きく役割を担ってきたと報告している。

第２節　スポーツの社会化に関する研究

第１項 スポーツの社会化の概念について

本研究では、ジェンダー・スポーツへの参加過程と要因を明らかにする際に、スポーツの社会化を参考にするため、本節で社会化について概観する。

人間は、生まれながらに言葉を話したり、適切な行動をとったりすることはできない。社会化とは、人間が社会生活を営むようになるためには、誕生してから生涯にわたるライフステージにおいて学習が必要であり、さまざまな知識や価値、行動様式を学習することにより社会の一員として適応していくようになる。個人が他者との相互作用を通して、知識や価値および規範を学習し、社会生活における行動様式を発達させる学習過程

を社会化という[19]。社会化は、社会学、心理学、教育学における重要な概念であるが、その定義は学問分野や研究者が依拠するパラダイムにより一様ではないと山口[19]は報告している。また、社会化概念も時代の変化と無縁ではない。かつては、幼児が社会生活を営むことのできる成人になる過程と捉えられていたが、長寿化の影響から、「幼児期―児童期―青年期―成人期―中年期―高齢期」というすべてのライフステージにおける学習過程を含むように変化していることを明らかとした[20]。

エリクソン[21]は、アイデンティティ形成はある一定の期間に形成されるものではなく、ライフサイクルの中で生涯にわたって形成されていくものであると定義づけしている。特に、青年期はアイデンティティ形成の最終段階であり多くの役割によって、これまでになく深く苦しむ傾向があると指摘している。なぜならば、青年期においてアイデンティティ対アイデンティティの拡散という問題がある。これまで幼少期から培ってきたアイデンティティはこの青年期に徐々に統合されていくものであるが、アイデンティティの拡散によって自分が何者であるのか分からずに混乱し、社会的位置づけも得ることのできない状態が訪れることがあるのが、青年期であることを指摘している。つまり、幼少期からの学習過程によって身についてきた規範や行動様式、価値観が青年期のアイデンティティの拡散や統合により混乱をきたすことが考えられる。

これらのことから、高校生を調査の対象とすることがジェンダー・スポーツ参加者のアイデンティティ形成過程を明らかにすることは有意義であると考えられる。

スポーツの実践や観戦もまた一つの学習過程であり、社会化過程といえる。スポーツ活動を楽しむために家族や友人たち、指導者などの重要な他者と関わりながらスポーツの技術だけではなく、ルールや教養を身につける。社会化研究は、1960 年代末期に北米で始まり、国際的に理論研究と実証研究の両面から発展し、スポーツ社会学の中心的な研究分野となった[19]。

スポーツの社会化研究の代表的なものが、図 1 に示したケニヨンとマクファーソンが行った社会的学習理論に基づいた、スポーツの社会化理論を構築した研究[22]である。スポーツの社会化は、主に「スポーツへの社会化（図 1 赤い囲み）」と「スポーツによる社会化」の 2 つに分けられる。図 2 は、図 1 の赤い囲み部分のスポーツへの社会化を抜き出して示したものである。スポーツへの社会化は様々な身体的・心理的特性や性別、出生順、職業、年齢、社会経済的地位などの「個人的属性」をもった個人が、両親や兄弟、コーチ、教師、友人、スター選手といった「重要な他者」との相互作用をもちなが

ら、学校や地域、クラブ、職場という「社会化環境」に影響を受けてスポーツに関する知識や教養、体力や技術などの諸資質を獲得していく学習過程のことである[23]。

一方で、スポーツによる社会化とは、スポーツ参加を通して態度や価値を学ぶことによって、性格形成や社会性の発達にどのように役割を果たすかについて焦点を当てている[19]。

本研究では、図2で示したスポーツへの社会化に着目し、ジェンダー・スポーツへ参加する男子高校生の実態と参加要因を明らかにする。

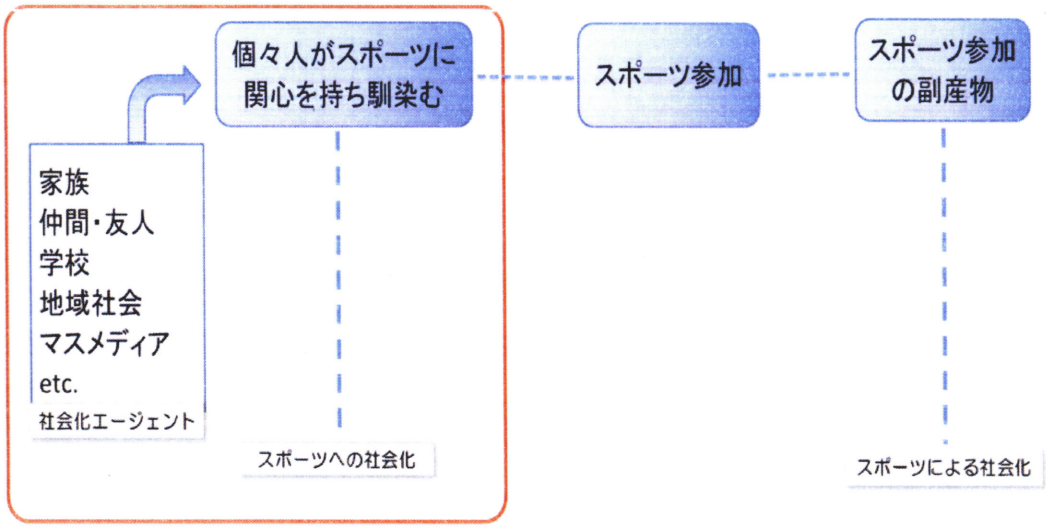

図1. スポーツの社会化（Kenyon&Mcpherson,1973）を基に筆者作図

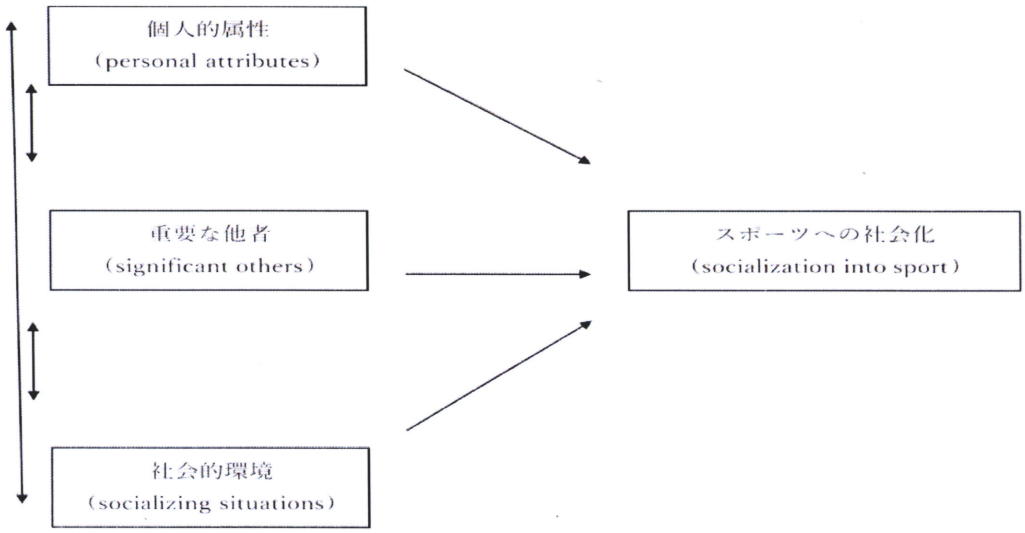

図2. スポーツへの社会化（Kenyon&Mcpherson,1973）を基に筆者作図

第２項 日本におけるスポーツへの社会化研究

日本においてもケニヨンらの理論を基に「一流競技者のスポーツへの社会化に関する研究」[24]が報告されている。日本の一流競技者の直接スポーツ参与に影響を及ぼす過去及び、現在の社会化エージェントを明らかにすることを目的とし、「初期のスポーツへの社会化の状況」、「4つのライフステージからみた直接スポーツ参与の実態と重要な他者」、「スポーツ技能の自己認知評価」、「スポーツに対する態度」などが調査項目として設定された。主な重要な他者は、父親や学校の先生であった。社会化環境は、学校と家庭が重要な社会化エージェントであり、野球を行っていたサンプルは近隣住民も重要な社会化エージェントとして捉えていることなどが報告されている[24]。

また、山口ら[25]は子供と一般成人を対象とした研究を行った。子どもを対象とした研究では、スポーツ参与には主に、両親と友人の影響が強く、特に同性の親と同性の友人が重要な他者であることを報告している。海老原ら[26]の小学校高学年のスポーツ少年団を対象とした研究においても山口ら[25]の研究と同様の結果となったことが報告されている。また、スポーツ参与は出生順位との関連があり、長子、一人っ子は親への依存度が強く、逆に中間子と末っ子は父親離れの傾向がみられることなどが報告されている[25]。

一般成人を対象とした研究では、現在のスポーツ参加頻度は過去のスポーツ経験や部活経験に強く影響され、スポーツへの態度が現在の参加頻度を規定していることが報告されている。そして、スポーツ参加頻度は女子よりも男子の方が高いが、この性差は年々小さくなる傾向にあることなどが報告されている[25]。

その他にも、久保[27]によって行われたマイナースポーツ種目競技者のスポーツへの社会化過程に関する研究では、メジャー種目との比較を通して、ホッケー選手の社会化過程及びスポーツキャリアを明らかにした。半数以上のサンプルが、高校入学後に活動を開始し、小学校や中学校で開始した者は極めて少数であった。社会化エージェントの社会化環境では、活動を開始した所属機関は、開始時期とも関連しており、7割以上のサンプルが学校のクラブで活動を開始し、スポーツ少年団で開始したサンプルは少なかった。また、スポーツ参加歴では、半数以上のサンプルがスポーツトランスファーを経験しており、ホッケーを開始する以前に野球やサッカーを行なっていたサンプルが多く見られた。ホッケーを開始するにあたり，競技を始めた動機・影響を受けた社会化エージェントは友人・知人の影響が強く、マスメディアや地域のクラブはほとんど影響して

いないという結果であった。メジャー種目での重要な他者は、父親や友人、兄弟の影響を強く受けているのに対して、ホッケーでの重要な他者は、先輩、友人、教師が多く見られた。また、メジャー種目とは異なり、家族の影響を受けているサンプルが少なく、部員獲得のために「先輩」や「教師」が選手を勧誘しているようであると考察している。

久保[27]の研究では、スポーツ種目によって社会化エージェントに相違が生じることが明らかになった結果に注目しておきたい。

本研究において、マイナースポーツ種目を扱うことから久保[27]によって行われた研究結果と同様な結果になることが予想される。しかし、久保[27]の研究では、重要な他者では両親として、父親と母親が一つにまとめた要因となっており、父親の影響なのか母親の影響なのか詳しいことは明らかではなかった。また、姉妹の影響について検討がなかったことから、本研究では、両親を父親と母親とに分け、さらに兄弟に加え姉妹の項目設定することとした。

また、久保[27]は、マイナースポーツであるホッケーの選手の半数以上がスポーツトランスファーを経験してきたことも明らかにした。このトランスファーの原因として、マイナースポーツを行う環境が少なく、競技を始めるあるいは、競技に触れる時期が遅かったことを久保[27]は挙げていた。しかしながら、すべてのマイナースポーツ競技において、環境不足が原因とは考えにくい。日本においては、小学生や中学生までは女子児童や生徒がサッカーや野球に参加できるものの、運動部活動が始まる時期になると部活動自体に所属できない、競技を継続しにくい状況が生じる。その結果、類似したスポーツに流出する、転出するケースがみられる。このようなトランスファーの事例に対しては、スピルオーバーの概念の援用が有効なのではないかと考えられる。

山田[28]は大学運動部に所属する学生をとりまく競技ストレス、抑うつ、アスリート・バーンアウト、自我同一性の問題、キャリア・トラディッション、キャリア・ストレスなどのストレス現象は多様であることに注目した。そして、学生競技者が抱える「大学生」と「競技者」という多重役割間で「一方の役割で生じたネガティブな状況と意識が他方の状況と意識にネガティブな影響を及ぼす」ネガティブスピルオーバー(以後、NSP)が生起することを確かめ、それが抑うつにどの程度の影響力を示すのかを検証することを目的として研究を行った。

多重役割の問題は、多重役割への従事が人間の健康状態に及ぼす影響は、大きく分けて 2 つの理論仮説から研究が展開されてきたとしている。Goode[29]は人間の能力的許

容量には限界があるため、多重役割への従事は健康を阻害するというネガティブな仮説（欠乏仮説）である。もう１つはSieber[30]の多重役割への従事が人間の生活を充実させるために健康を促すというポジティブな仮説（増大仮説）である。

多重役割間の関係性については、流出（スピルオーバー）、補償、分離という３つの理論仮説から研究が進められてきた。スピルオーバーの定義は様々で、一般的には「一方の役割で生じた状況と意識が他方の状況と意識に影響を及ぼすこと」と定義されている。これに対し、補償は一方の役割で生じた不満のために他方の役割において満足を保つことを意味している。また、分離は、両方の役割が独立しているという関係性を示すとしている。また、実際のスピルオーバーはその方向性と、他方に与えるポジティブな影響とネガティブな影響に大別されることを山田ら[28]は述べている。日本スポーツ振興センターが実施しているナショナルタレント発掘・育成（NTID）プログラムなどは、ポテンシャルが認められ的性のあるスポーツ種目に転向するというポジティブな影響を与えるスピルオーバーとして捉える事ができよう。

これらの概念などから、山田[28]によると大学生競技者は、大学生と競技者という多重役割を担っており、それに伴うNSPをストレスとして訴える傾向にあること、大学競技者の訴えるNSPは心理的なものと物理的なもので構造化されることを明らかにした。また、全てのNSPは抑うつに対して影響力をもち得ること、大学生競技者のストレスを理解し、メンタルヘルスに介入するための一概念としてNSPに注目することは、有意義であることを報告している。

また、山田ら[28]が指摘するNSPは必ずしも大学生の運動競技者だけでなく、中学生、高校生の運動部活動で競技をしている者は同様に、多重役割へ従事していると考えられる。そのため、このスピルオーバーの概念は本研究にも援用できるであろうと考えられる。

第３節　男子新体操に関する研究

第１項 日本における男子新体操の研究

現在、日本における男子新体操の研究は、筋・骨格に関するバイオメカニクスやスポーツ外傷・障害などのスポーツ医科学的な分野が主である[31]。

そのため野田ら[31]は、男子新体操の競技人口の増加や競技の国内的・国際的発展を目指し、その目標達成の一助になるのが男子新体操における学術研究の充実だと考えた。

男子新体操研究の可能性を模索するために、まずは男子新体操および新体操を行う男子選手に関する先行研究を領域横断的に概観し、そのうえでとくに人文社会科学的方法による男子新体操研究の可能性を展望することを目的とした。野田ら[31]の研究では、男子新体操に注目する際の主要な視点は、ジェンダーであるとしている。一方で、人文社会学的な研究は、特にヨーロッパ圏を中心として男子新体操に関するジェンダー研究が多く報告されているが日本では極めて少ない。これらのことから、日本においてもバイオメカニクスなどのスポーツ医科学的分野だけでなく、ジェンダー視点からの人文社会学的な研究が必要であることを述べている[31]。

第２項 海外における男子新体操の研究

Otake[32]は、新体操という競技が「女子新体操」を連想させるために男子新体操（選手）がステレオタイプ化されやすい、というストーリーがしばしば語られていることを指摘している。また Reekie[33]は、オリンピックイヤーになるとオリンピック競技に残された最後の「性差別」として、シンクロナイズドスイミングと新体操にのみ男子種目がないことが思い出されるようだと述べ、新体操が女性的なスポーツであると連想される傾向にあることを両者は指摘している。

Chimot and Louveau[34]は、新体操を行う 10 代～20 代前半の男性がどのように「女性のスポーツ」を行う自身のジェンダー・アイデンティティを構築しているか、インタビュー調査を元に分析を行った。Chimot and Louveau[34]によれば、新体操を女子のチームの中で少年が行うことは、社会の「男らしさ」をめぐる規範と齟齬をきたすと男性や同性の同級生、チームメイトである少女などにみなされることがあり、そのトラブルの解決する方法としてヘゲモニックな女性的なものを含んだ「男らしさ」とは異なる男らしさを模索するという戦略が取られるとしている。ここでジェンダー・アイデンティティの構築の計画に用いられるのが、「context, nature, effectiveness」の 3 つの戦略が取られていることが報告された。

同様に Beki and Gal[35]は、スポーツを社会のジェンダー規範が再演される場としてのみとらえるのではなく、スポーツによって新しいジェンダーのパターンが構築される可能性を指摘している。Beki and Gal[35]は、女性の新体操競技者のみを対象とした研究であるが、女子新体操と男子新体操には独特な異なる「女らしさ」や「男らしさ」を構築する可能性があると男子新体操にも言及している。

一方で、Kamberidou et al.[36]は、ジェンダー化された近代スポーツの中では「男性」もジェンダーであることに目が向けられにくいと指摘している。そのうえでKamberidou et al.[36]は、男子新体操競技が登場した当初から「女性らしさ」の理想的な表現手段であると見なされてきた新体操に、男性がどのように参入し得るかについて考察した。

これらの研究はスポーツによる社会化の視点からインタビュー調査などが行われているため、ジェンダー・スポーツを始めたきっかけなどスポーツへの社会化の項目が明らかではなかった。しかし、ジェンダー・スポーツを行っている青少年や成人が直面している問題点が浮き彫りになっており、男性をジェンダー・マイノリティと捉えた研究を進めることによりジェンダー・スポーツを行っている青少年や成人が直面している問題解決の一助になり得る。また、ジェンダー・スポーツの普及振興の一助になることが考えられる。

第４節　結果の予測

本研究は、男性をジェンダー・マイノリティとして捉え、ジェンダー・スポーツに参加している男性に関する基礎資料の収集とジェンダー・スポーツに参加している男子高校生の実態を把握し、男子高校生のジェンダー・スポーツ参加過程と参加に至る要因について明らかにすることを目的とした。

しかし、男子高校生を対象としたジェンダー・スポーツに関する研究は少なく、仮説の設定は困難である。したがって、本研究においては結果の予測にとどめた。

１．ジェンダー・スポーツへの参加における重要な他者は、幼稚園/保育園～小学４－６年生までは「同性の両親」または「同性の兄弟」が影響している。また、中学生以降は、「部活の指導者」や「外部指導者」、「部活仲間」が影響を与える。

２．ジェンダー・スポーツへの参加過程は、トランスファーと流出（スピルオーバー）の２つに分けられる。

第３章　研究方法

第１節　研究対象

本研究では、ジェンダー・スポーツに参加している男子高校生を対象とする。笹川スポーツ財団[37]によると、日本ワールドゲームズ協会に加盟、準加盟している中央競技団体は 84 団体あり、これらのスポーツ振興の直接の担い手である団体を対象に毎年、中央競技団体の現状を把握し、スポーツの効果的な普及および強化の方策を検討する基本資料を得ることを目的に調査を行っている。そのうち、本研究ではジェンダー・スポーツに参加している男子高校生を対象としていることから、女性競技者の競技人口が多く、男性競技者が少人数であるスポーツ・マイノリティの競技団体に注目した。その理由として、ジェンダー・スポーツと呼ぶ明確な基準がないことから、本研究では、第１章３節で定義したように、女性競技者の競技人口が多く、男性競技者が少人数であるスポーツをジェンダー・スポーツと判断する一つの基準とした。このような条件から調査対象は男子新体操を含む「体操競技」、「エアロビック」、「フィギュアスケート」、「チアリーディング」が条件を満たした。しかしながら、フィギュアスケートとチアリーディングの男子競技者の競技者数が明確でないことから、今回の調査では対象から除外した。

新体操は全国高等学校体育連盟の統計調査[38]より、男子新体操競技者数が 500 名以上いることが明らかとなっていた。一方で、エアロビック競技は高等学校の部活動にはなく、高校生の競技者数が不明であった。しかし、日本エアロビック連盟へのヒアリングにより、高校生と大学生を含め 100 名以上いることが確認された。

このような条件から調査対象を選定した結果、「男子新体操」、「エアロビック」を調査対象とした。

第２節 調査方法

調査方法は、郵送法を用いて質問紙調査を実施した。各団体に調査者が直接伺い、調査の依頼を行った。承諾のとれた団体より提供されたチームや指導者に対し改めて調査用紙と依頼文を添えて質問紙を送付した。調査手順は、調査用紙を顧問または指導者を通じて生徒・選手へ配布、記入、記入後に顧問または指導者が回収し、同封していた封筒に入れて郵送してもらい質問紙の回収を行った。

第３節 調査項目

表１は本研究における調査項目と項目内容などについて示したものである。本研究の調査項目は、川辺[24]がケニヨンとマクファーソンの社会化に関する理論を基に行った、一流競技者の社会化に関する研究から各年齢期の「スポーツ参加歴」や「社会化エージェント」、「競技を本格的に始めた理由」に関する４項目を援用し設定した。回答は、幼少期から高校生までの各年齢期の「スポーツ参加歴」や「所属団体」、「影響力が強かった他者」については、回答欄の選択肢から２つまで選び、回答を記入し「競技を本格的に始めた理由」について回答欄の選択肢から複数回答によって回答を記入してもらった。

また「『競技の魅力に関する項目』は、競技ルールなど男女の新体操の違いやエアロビック連盟からのヒアリングから設定した。項目の中に「男性らしい」や「華やかさ」などの言葉を加えた。

また、『競技の普及・振興に関する項目』は、各競技の組織の方から普及・振興に関して力を入れている事業などをヒアリングし、項目を設定した。

これらの調査項目への回答は、「１.全く同意しない～６.とても同意する」までのリッカート法を用いて６段階の等間隔スケールとみなし、項目を設定した。項目の回答は当てはまる番号に○を記入してもらった。

また、『現在の活動状況に関する項目』は、主に１週間の練習回数や時間、高校入学後の大会出場回数、ケガの有無や年間にかかる費用などスポーツ白書[39]を元に項目を設定した。項目の回答は当てはまる番号に○を、空欄には直接の記入をしてもらった。

さらに、個人的属性として、人口統計学的変数をもとに、学年、身長や体重の体格、居住地域、現住居、同居人の５項目を設定した。項目の回答は当てはまる番号に○を、空欄には直接の記入をしてもらった。

第４節　調査手順

第１項 男子新体操における調査

質問紙を作成し男子新体操は、全国高等学校総合体育大会の体操競技の開催される期間に調査者が直接伺い、全国高等学校体育連盟男子新体操専門部の委員長に直接依頼を行った。同時に質問紙に関する検討を行ってもらい、後日、専門部委員長を通じて全国の男子新体操の部活顧問や指導者から承諾を得た。質問紙は修正を行った後、委員長と

調査方法や調査項目ついて再度検討を行い、質問紙を修正・完成させた。調査は、9月12日～24日の12日間の日程で提供された全国の男子新体操部のリストを基に、郵送法を用いて質問紙調査を実施した。

第2項　エアロビックにおける調査

エアロビックを対象とした調査も男子新体操同様に、質問紙を作成し、公益社団法人日本エアロビック連盟へ直接調査の依頼を行い、承諾された。9月4日に東洋大学で行われた第5回全日本エアロビック高校選手権・第7回全日本エアロビック学生選手権において9月4日～18日の14日間の期間でパイロットテストを実施した。パイロットテストの結果を分析後、質問紙の修正後、担当者と質問紙の再検討を行い、質問紙を完成させた。エアロビック連盟に加入している全国の男子エアロビック競技者の男子高校生と大学生を対象に質問紙調査を11月30日～12月7日の7日間の期間で行った。競技者の住所などはエアロビック連盟より提供があったが、個人情報保護のため、同連盟の担当者の監修の下で発送作業を行った。

表１．調査項目一覧

No.	調査項目	項目内容	引用元
1	各年齢期に主に参加してきたスポーツ種目	スポーツ参加歴	川辺(1981)
2	各年齢期に所属してきた場所または団体	社会化環境	
3	各年齢期に影響の強かった人	重要なる他者	
4	各競技を本格的に始めた理由	重要なる他者	
5	各競技の魅力について	ジェンダーについて	オリジナル
6	進学理由	競技成績	スポーツ青年白書(2012)
7	練習日数と時間		
8	大会出場回数		
9	けがについて		
10	年間費用		
11	家族からの経済的なサポート	希望するサポートについて	
12	家族からの日常生活のサポート		
13	家族からの食事(栄養)面のサポート		
14	学校からの施設面のサポート		
15	学校からの指導面のサポート		
16	学校からの経済的なサポート		
17	各競技組織からの施設面のサポート		
18	各競技組織からの経済的なサポート		
19	各競技組織からの経済的なサポート		
20	より男性的なアクロバティックな演技に変更するべき	競技の普及・振興について	オリジナル
21	シンプルな衣装にするべき		
22	芸術性を追求するべき		
23	芸術性よりも男性らしい力強さとアクロバティック演技を採点対象とするべき		
24	テレビなどのメディアを通して魅力を広く伝えるべき		
25	男女共通のルールに統一し、男女混合競技にするべ		
26	採点方法の上限を取り払うべき		
27	国際大会を倍増し、各競技を普及するべき		
28	今後の競技予定・計画	今後の競技継続意志	
29	学年	個人的属性	
30	身長		
31	体重		
32	居住地域		
33	現在の住まい		
34	同居人		

第５節　分析方法

本研究での分析は、統計解析パッケージ IBM SPSS Statistics 21 を用いて、各項目を単純集計し、個人的属性、各年齢期でのスポーツ参加歴、社会化環境、重要な他者、各種目を本格的に始めた要因、各競技の魅力について分析を行った。

また、結果の予測２で示したジェンダー・スポーツへの参加過程は、久保[27]のトランスファーに関する結果やスピルオーバーの概念を援用し、流出（スピルオーバー）とトランスファーの２つのパターンに各年齢期のスポーツ参加歴から以下のように分類し、分析を行った。

1. 幼少期や小学生の頃から現在まで、男子新体操やエアロビックを行ってきた者、または、器械体操やダンスなど似たような種目から男子新体操やエアロビックなどのジェンダー・スポーツへ移ってきた者を「流出（スピルオーバー)」とした。
2. 中学や高校まで男子新体操やエアロビック、それらに似た種目を行って来ず、種目を中学や高校に進学してからジェンダー・スポーツへ参加した者を「Transfer」とした。

第４章　結果

第１節　サンプルの属性

第１項　本研究におけるサンプル

本研究では、ジェンダー・スポーツ参加者（男子新体操、エアロビック）における男子高校生を対象とした。その結果、男子新体操は 591 部配布、回収数 235 部、有効回答数は 232 部であった。また、エアロビックは 53 部配布、回収数 22 部、有効回答数 5 部であった。これらの 2 回の調査より、644 部配布、総回収数 254 部、回収率 39.4% であった。

第２項　サンプルの個人的属性

表 2、表 3 は本研究におけるサンプルの個人的属性についてまとめたものである。ジェンダー・スポーツ参加者の学年は、高校 1 年生が 43.7%（100 名）で最も多く、次いで 2 年生 35.8%（82 名）、3 年生 20.5%（47 名）であった。

居住地域は、九州・沖縄が 29.7%（69 名）で最も多く、次いで東北 17.7%（41 名）、関東 15.9%（37 名）であった。

現在の住まいは、自宅と回答したサンプルが 93.5%（216 名）と最も多く、合宿所や寮に住んでいるサンプルはわずかであった。その同居人として母親（89.0%）や父親（75.1%）が多く、兄弟や姉妹は、年下の弟（30.4%）、妹（25.3%）が兄姉よりも多い傾向にあった。

また、身体的特徴として、身長と体重の平均値は身長が 168.1cm、体重が 56.8kg であった。この平均値はスポーツ庁で行われる「体力・運動能力調査」[40]の高校生平均身長・体重の身長 170.0cm、体重 60.9kg に比べ体格がやや小さい傾向がみられた。

サンプルの競技レベルは、ブロック大会に出場したことのあるサンプルが 60.3%（143 名）と多く、次いでインターハイ/全国大会 37.1%（88 名）、全日本/世界選手権 16.5%（39 名）の順で多く、競技レベルの高いサンプルが半数近くいることが明らかとなった。

表 2. 個人的属性

		%	n
学年	1年生	43.7	100
	2年生	35.8	82
	3年生	20.5	47
	合計		229
居住地域	北海道	6.5	15
	東北	17.7	41
	北陸	3.0	7
	関東	15.9	37
	東海	13.8	32
	中部	1.3	3
	近畿	9.5	22
	中国	2.6	6
	九州・沖縄	29.7	69
	合計		232
現在の住まい	自宅	93.5	216
	合宿所	4.3	10
	その他	2.2	5
	合計		231
同居人	父	75.1	178
(複数回答)	母	89.0	211
	兄	22.8	54
	弟	30.4	72
	姉	17.7	42
	妹	25.3	60
	祖父	12.2	29
	祖母	16.0	38
	その他	7.2	17
競技レベル	全日本/世界選手権	16.5	39
(複数回答)	国体/ワールドカップ	3.0	7
	インターハイ/全国大会	37.1	88
	ブロック大会	60.3	143

表 3. 個人的属性　平均値

	n	最小値	最大値	mean	SD
身長	232	151	195	168.1	6.09
体重	230	34	85	56.8	6.45

第２節　スポーツ参加歴について

表４は各年齢期におけるスポーツ参加歴についてまとめたものである。幼稚園/保育園の頃のスポーツ参加は、「やっていない」と回答したサンプルは 47.9%（103 名）で最も多く、次いで、「水泳」16.3%（35 名）、「器械体操」10.7%（23 名）、「サッカー」9.8%（21 名）、「新体操/エアロビック」4.7%（10 名）の順であった。その他の種目として、テニスや陸上教室などの回答が見られた。

小学１－３年生の頃のスポーツ参加は、「水泳」と回答したサンプルが 25.2%（70 名）で最も多く、「やっていない」16.5%（46 名）、サッカー12.6%（35 名）、「新体操/エアロビック」10.1%（28 名）、器械体操 8.3%（23 名）、「空手」が 8.0%（21 名）の順であった。

小学４－６年生になると、「新体操/エアロビック」と回答したサンプルが 17.0%（47 名）であり、次いで「水泳」15.8%（45 名）、「サッカー」13.4%（38 名）、「野球」12.3%（35 名）、「やっていない」7.7%（22 名）、「器械体操」7.0%（20 名）の順であった。

中学生に進学すると、「新体操/エアロビック」と回答したサンプルが 29.7%（82 名）で最も多く、次いで「その他」10.5%（29 名）、「サッカー」9.8%（27 名）、「野球」8.3%（23 名）、「バレーボール」8.0%（22 名）の順であった。

高校生に進学すると、「新体操/エアロビック」と回答したサンプルが 97.9%（233 名）であり、現在の競技種目に至っている。

表 4. スポーツ参加歴

幼稚園/保育園	%	n	小学1-3年生	%	n	小学4-6年生	%	n	中学生	%	n	高校1年生	%	n
新体操/エアロビック	4.7	10	新体操/エアロビック	10.1	28	新体操/エアロビック	17.0	47	新体操/エアロビック	29.7	82	新体操/エアロビック	97.9	233
器械体操	10.7	23	器械体操	8.3	23	器械体操	7.0	20	器械体操	7.6	21	器械体操	0.4	1
サッカー	9.8	21	サッカー	12.6	35	サッカー	13.4	38	サッカー	9.8	27	サッカー	0.4	1
野球	0.5	1	野球	7.2	20	野球	12.3	35	野球	8.3	23	空手	0.4	1
水泳	16.3	35	水泳	25.2	70	水泳	15.8	45	水泳	0.4	12	バドミントン	0.4	1
卓球	0.5	1	卓球	0.7	2	卓球	0.4	1	卓球	2.9	8	ダンス	0.4	1
バスケットボール	0.5	1	バスケットボール	2.9	8	バスケットボール	4.2	12	バスケットボール	7.2	20	合計		238
柔道	0.5	1	柔道	2.2	6	柔道	3.2	9	柔道	3.3	9			
剣道	0.5	1	剣道	1.1	3	剣道	1.8	5	剣道	2.2	6			
空手	0.9	2	空手	8.0	21	空手	6.3	18	空手	2.5	7			
ダンス	1.9	4	ダンス	0.7	2	ダンス	1.8	5	ダンス	0.7	2			
バレーボール	0.9	2	バレーボール	1.4	4	バレーボール	2.5	7	バレーボール	8.0	22			
やっていない	47.9	103	やっていない	16.5	46	やっていない	7.7	22	やっていない	2.9	8			
その他	4.7	10	その他	3.6	10	その他	7.0	20	その他	10.5	29			
合計		215	合計		278	合計		284	合計		276			

複数回答

第３節　社会化環境について

表 5 は社会化環境についてまとめたものである。幼稚園/保育園の頃のスポーツ所属団体は、「所属していない」と回答したサンプルが 50.0%（105 名）と最も多く、次いで「スイミングスクール」16.2%（34 名）、「地域のスポーツ少年団」13.8%（29 名）、「民間の体操クラブ」10.5%（22 名）の順であった。

小学１－３年生の頃のスポーツ所属団体は、「地域のスポーツ少年団」と回答したサンプルが 31.9%（80 名）と最も多く、次いで「スイミングスクール」25.9%（65 名）、「所属していない」19.1%（48 名）、「民間の新体操/エアロビッククラブ」8.0%（20 名）の順であった。

小学４－６年生になると、「地域のスポーツ少年団」37.0%（98 名）が最も多く、次いで、「スイミングスクール」「民間の新体操/エアロビッククラブ」15.5%（41 名）、「学校の部活動」11.3%（30 名）の順であった。

中学生に進学すると、「学校の部活動」58.4%（156 名）が最も多く、次いで「民間の新体操/エアロビッククラブ」18.0%（48 名）、「地域のスポーツ少年団」11.6%（31 名）の順であった。

高校生では、「学校の部活動」と回答したサンプルが 84.5%（201 名）と最も多く、次いで「民間の新体操/エアロビッククラブ」8.8%（21 名）、「地域のスポーツ少年団」2.9%（7 名）の順であった。

これらの結果より、幼少期ではスポーツに参加しているサンプルが少ないことから、「所属していない」との回答が多いが、年齢期が進むごとにそれぞれの参加スポーツの所属団体に所属していく傾向ある。小学校４－６年生からは「学校の部活動」に所属するサンプルが倍増する傾向にあることが明らかとなった。

表５.社会化環境

幼稚園/保育園			小学1-3年			小学4-6年生			中学生			高校1年生		
	%	n		%	n		%	n		%	n		%	n
地域のスポーツ少年団	13.8	29	地域のスポーツ少年団	31.9	80	地域のスポーツ少年団	37.0	98	地域のスポーツ少年団	11.6	31	地域のスポーツ少年団	2.9	7
民間の体操クラブ	10.5	22	民間の体操クラブ	6.8	17	民間の体操クラブ	6.0	16	民間の体操クラブ	1.5	4	民間の体操クラブ	1.3	3
民間の新体操クラブ/エアロビッククラブ	2.9	6	民間の新体操クラブ/エアロビッククラブ	8.0	20	民間の新体操クラブ/エアロビッククラブ	15.5	41	民間の新体操クラブ/エアロビッククラブ	18.0	48	民間の新体操クラブ/エアロビッククラブ	8.8	21
スイミングスクール	16.2	34	スイミングスクール	25.9	65	スイミングスクール	15.5	41	スイミングスクール	3.7	10	スイミングスクール	0.0	0
学校の部活動	2.4	5	学校の部活動	4.0	10	学校の部活動	11.3	30	学校の部活動	58.4	156	学校の部活動	84.5	201
所属していない	50.0	105	所属していない	19.1	48	所属していない	9.1	24	所属していない	4.5	12	所属していない	1.7	4
その他	4.3	9	その他	4.4	11	その他	5.7	15	その他	2.2	6	その他	0.8	2
合計		210			251			265			267			238

複数回答

第４節　スポーツ参加に最も影響力のあった他者について

表６は重要な他者についてまとめたものである。幼稚園/保育園の頃は、「特にいない」と回答したサンプルが 57.7%（112 名）と最も多く、次いで「母親」16.5%（32 名）、「父親」7.7%（15 名）、「学外の指導者」「兄弟」3.1%（6 名）の順であった。

小学１－３年生の頃は、「特にいない」と回答したサンプルが 31.6%（67 名）、次いで「母親」17.0%（36 名）、兄弟 10.8%（24 名）、「父親」9.0%（20 名）、学外の指導者 7.7%（17 名）の順であった。

小学４－６年生の頃は、「特にいない」と回答したサンプルが 22.1%（49 名）、次いで「母親」13.1%（29 名）、「学外の指導者」11.3%（29 名）であり、「兄弟」「部活仲間」が 10.4%（23 名）であった。

中学生の頃は、「特にいない」と回答したサンプルが 21.4%（49 名）で最も多く、次いで「部活仲間」19.7%（45 名）、「先輩」13.5%（31 名）、「学外の指導者」11.8%（27 名）、「兄弟」7.0%（16 名）の順であった。

高校生になると「部活の指導者」と回答したサンプルが 23.2%（52 名）と最も多く、次いで「先輩」20.5%（46 名）、「特にいない」17.9%（40 名）、「部活仲間」15.0%（35 名）の順であった。

これらの結果から、幼少期の頃から小学校 1－3 年生までは、家族の特に母親や兄弟の影響が強い。また、小学校 4－6 年から中学校にかけて家族の影響よりも部活仲間や学外指導者などの所属団体からの影響を強く受けている。そして、高校生になると所属団体の影響が強くなる事が顕著に表れた。

表 6. 重要な他者

幼稚園/保育園			小学1-3年			小学4-6年			中学生			高校生		
	%	n		%	n		%	n		%	n		%	n
父親	7.7	15	父親	9.0	19	父親	9.9	22	父親	4.4	10	父親	3.6	8
母親	16.5	32	母親	17.0	36	母親	13.1	29	母親	5.2	12	母親	4.9	11
兄弟	3.1	6	兄弟	11.3	24	兄弟	10.4	23	兄弟	7.0	16	兄弟	2.2	5
姉妹	1.5	3	姉妹	2.4	5	姉妹	2.3	5	姉妹	1.7	4	姉妹	0.4	1
親戚（いとこ）	1.0	2	親戚（いとこ）	1.9	4	親戚（いとこ）	0.9	2	親戚（いとこ）	0.9	2	親戚（いとこ）	0.0	0
部活の指導者	1.0	2	部活の指導者	1.4	3	部活の指導者	2.3	5	部活の指導者	6.6	15	部活の指導者	23.2	52
学外の指導者	3.1	6	学外の指導者	6.1	13	学外の指導者	11.3	25	学外の指導者	11.8	27	学外の指導者	5.4	12
担任教師	1.0	2	担任教師	0.9	2	担任教師	0.9	2	担任教師	0.9	2	担任教師	1.8	4
部活仲間	1.0	2	部活仲間	5.2	11	部活仲間	10.4	23	部活仲間	19.7	45	部活仲間	14.7	33
先輩	0.5	1	先輩	3.3	7	先輩	5.4	12	先輩	13.5	31	先輩	20.5	46
部活以外の友人（含む恋人）	2.1	4	部活以外の友人（含む恋人）	6.1	13	部活以外の友人（含む恋人）	7.2	16	部活以外の友人（含む恋人）	4.4	10	部活以外の友人（含む恋人）	3.1	7
特にいない	57.7	112	特にいない	31.6	67	特にいない	22.1	49	特にいない	21.4	49	特にいない	17.9	40
その他	3.6	7	その他	3.8	8	その他	4.1	9	その他	2.6	6	その他	2.2	5
合計		194	合計		212	合計		222	合計		229	合計		224

複数回答

第５節　各種目を本格的に始めた理由について

表７と図８は、各種目を本格的に始めた理由についてまとめたものである。各種目を本格的に始めた理由について、テレビや YouTube などの「メディアを見て」と回答したサンプルは 68 名であり最も多く、次いで「新体操/エアロビックからの勧誘」が 53 名、「母親の勧め」51 名、「先輩からの勧め」47 名の順であった。

表 7．各種目を本格的に始めた理由

	%	n
父親の勧め	7.6	18
母親の勧め	19.4	46
兄弟の勧め	4.2	10
姉妹の勧め	2.1	5
部活指導者の勧め	18.6	44
学外指導者の勧め	9.3	22
部活仲間の勧め	18.1	43
先輩の勧め	19.4	46
新体操/エアロビックからの勧め	21.1	50
器械体操からの転向	7.2	17
他の競技からの転向	11.8	28
メディア（TV・Youtube）を見て	27.8	66
漫画を見て	0.4	1
その他	10.1	24
合計		420

複数回答

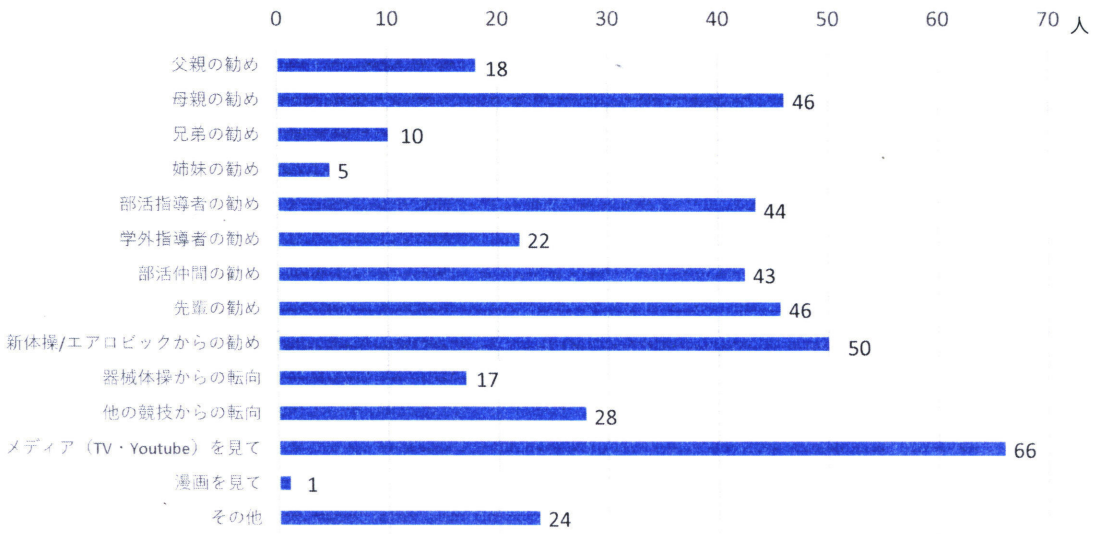

図２．種目を本格的に始めた理由

第６節　各種目の魅力について

表８は各種目の魅力についてまとめたものである。各種目の魅力について、「1.全く同意しない～6.とても同意する」の６段階の等間隔とみなして平均値を算出し、各項目を平均値の検定を行った。各種目の魅力について、最も平均値が高かった項目は、「タンブリング/アクロバティック動作」が 5.77 であり、次いで「男らしいダイナミックな演技・動作」5.67、「男らしい迫力とスピード感のある演技」5.64 であった。

表 8. 各種目の魅力について

	n	mean	SD
男らしいダイナミックな技	236	5.67	.70
手具操作/コンビネーション動作の面白さ	236	5.26	1.07
タンブリング/アクロバティック動作	236	5.77	.60
衣装の華やかさ	235	5.07	1.13
伴奏/音楽に合わせた演技	236	5.55	.79
繊細な演技力の追求	236	5.55	.78
協同作業の楽しさ	236	5.42	.86
男らしい迫力とスピード感のある演技	236	5.64	.80

第7節　ジェンダー・スポーツにおけるスポーツキャリア分析

表9は第3章第5節に基づき、スピルオーバーの概念を援用してスポーツ参加歴から、ジェンダー・スポーツへの参加過程をまとめたものである。スピルオーバーと分類されたサンプルは8.0%（n=19）、Transfer 92.0%（n=218）に分類された。ただし、Transfer に分類されたものの中には、幼稚園/保育園においてジェンダー・スポーツや似たスポーツを行っており、一度それらの種目をやめ、中学・高校になって再開するといった、スポーツの社会化理論で示される、スポーツの再社会化に近い過程を経るものが少数（6.8%：n=16）いることが明らかとなった。

図3は、本研究における男子高校生のジェンダー・スポーツへの参加過程を図示したものである。

表9．ジェンダー・スポーツへの参加過程

項目	%	n
流出（スピルオーバー）	8.0	19
Transfer	92.0	218
合計		237

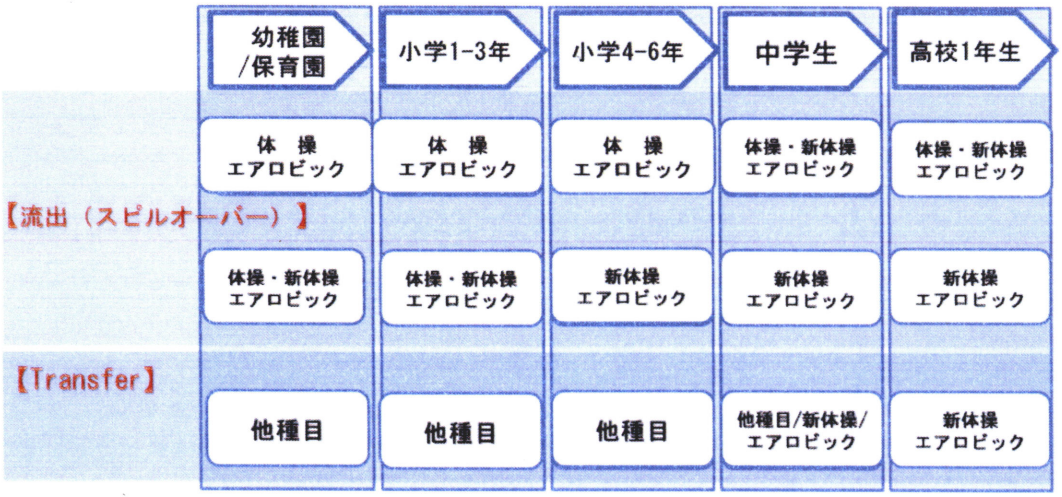

図3．ジェンダー・スポーツ参加過程

第５章　考察

山口ら[25]の研究では、社会化過程の重要な他者は小学１－３年生までは同性の両親や兄弟が強く影響すると報告されていた。しかし、本研究では小学校４－６年生まで同性の両親よりも異性である母親が強く影響することが明らかとなった。そのため、母親のやっていたスポーツが本研究のサンプルに影響しているのではないかと考えられるが、他の何らかの理由も考えられ、本研究では明らかにできなかった。また、個人的属性で「同居人」として母親が 89.0%、父親が 75.1%とサンプルの中には母子家庭で育ったサンプルがいるのではないかと推察されたが、明らかにはできなかった。

重要な他者が「特にいない」と回答したサンプルが各年齢期において多い割合を占めている結果にあり、これは TV や Youtube などのメディアの影響を受けて自分自身で競技に興味を持ったのではないかと推察される。

また、サンプルはスポーツ参加開始とともに地域のスポーツ少年団などに所属するが、指導者の影響が現れはじめるのは、小学校４－６年生からである。また、高校に進学すると所属する団体の指導者や部活仲間などが影響を与えていることが顕著に現れた。

本研究では各年齢期のスポーツ参加の結果より、スポーツを始めた年齢期としては幼少期からスポーツを始めたサンプルは少なく、小学１－３年生から何らかのスポーツを始める傾向がみられた。また、新体操やエアロビックを幼稚園/保育園の頃から始めたサンプルはわずかであった。小学１－３年生から中学生までは、サッカーや野球などの人気スポーツに参加するサンプルが多い傾向あるが、中学校に進学するとスピルオーバーやトランスファーにより新体操やエアロビックに参加するサンプルが倍増する傾向にあった。

川辺[24]の研究では、プロの選手では小学１－３年生頃から本格的に始める傾向があると報告されていたのに対し、本研究の結果では、小学校４－６年生や中学生頃から始める、または、高校に進学してからジェンダー・スポーツに参与する傾向にあった。ジェンダー・スポーツにおけるスピルオーバーでも、小学校から中学校進学時期よりも、中学校から高校進学時期の方が、スピルオーバーの割合が高くなるため、スピルオーバーは学校期での運動部活動が本格的に始まる、中学校から高校への移行期に起こることが推察される。ジェンダー・スポーツへの参加過程においては、スピルオーバーが 8.0%（n=19 名）、Transfer 92.0%（n=218）に分類された。また、Transfer に分類されたも

のの中には、再社会化と考えられるサンプルが 6.8%（n=16）いることが明らかとなった。このことから、男子新体操とエアロビックはスピルオーバーに分類されるサンプルは少数であり、Transfer が多い結果となった。久保ら[27]の研究では、マイナースポーツではトランスファーが約半数を占めていたが、本研究で対象としたジェンダー・スポーツにおいては、9割を占めることが明らかとなった。マイナースポーツに比べ、ジェンダー・スポーツは社会化環境が整っていないことが推察される結果となった。また、先行研究ではスピルオーバーをポジティブとネガティブに分類することが可能であるとしているが、本研究ではこのスピルオーバーと Transfer はネガティブかポジティブな転向なのかは明らかにすることが出来なかった。この点においては、スピルオーバーが生じやすい、中学校期から高校期への移行時に、質的な調査を行う必要性があると考えられる。

第６章　結論

本研究の目的は、男性をジェンダー・マイノリティとして捉え、ジェンダー・スポーツに参加している男性に関する基礎資料の収集とジェンダー・スポーツに参加している男子高校生の実態を把握し、男子高校生のジェンダー・スポーツ参加過程と参加に至る要因について明らかにすることであった。

男子高校生のジェンダー・スポーツへの参加過程は「流出（スピルオーバー」が 8.0%（n=19）、「Transfer」 92.0%（n=218）の２つのパターンに分類された。また、Transfer に分類されたものの中には、一度ジェンダー・スポーツを辞め、再度実施するという再社会化と考えられるサンプルが 6.8%（n=16）存在することが明らかとなった。また、当初のスピルオーバーが生じる学校期と設定した小学校から中学校への進学時期を、中学校から高校に進学する時期に変更する必要があることが示唆される結果となった。これらの結果からは、ジェンダー・スポーツへの参加過程においては中学校や高校といった、学校期の運動部活動が影響を与えていることが推察される結果となった。

男子新体操とエアロビックはスピルオーバーに分類されるサンプルは少数であり、久保ら[27]の結果と同様に Transfer が占める割合が高い結果となった。一方で、約 9 割が Transfer であることから、マイナースポーツに比べ、社会化環境が整っていないのではないかと推察される結果となった。

一方、男子高校生のジェンダー・スポーツへの参加に至る要因として、幼少期から小学校４－６年生までの重要な他者は、マイナースポーツの様に同性の両親ではなく、母親が最も影響していた。次いで、同性の兄弟が影響を与えていることが明らかとなった。また、中学校以降にジェンダー・スポーツへの参加に影響を与えるのは、「部活の指導者」や「学外指導者」、「部活仲間」が影響している。

ジェンダー・スポーツを始めたきっかけとして、母親の勧めや部活仲間や指導者の他に、TV や Youtube などのメディアの影響を受けていた。

本調査ではジェンダー・スポーツ参加歴やジェンダー・スポーツの参加要因と参加過程が明らかとなった。しかし、ジェンダー・スポーツ参加過程において生じる流出（スピルオーバー）や Transfer の理由が、ポジティブなのかネガティブなのかは、今回の調査では明らかにできなかった。そのため、今後インタビュー調査を行い、より詳細なデータを収集することが課題であると考えられる。

文献一覧

1) 佐伯聡夫，1997，「スポーツ，性的ヘゲモニーとジェンダー－問題の所在－」、日本体育学会編『体育の科学』47－6，杏林書院 404-408.

2) 井上俊，菊幸一(2012)．やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ　よくわかるスポーツ文化論．初版．京都．株式会社　ミネルヴァ書房

3) 江原由美子（2001）『ジェンダー秩序』　勁草書店

4) 江原由美子，山崎敬一，井上俊ほか編（1995）『岩波講座 現代社会学』

5) 伊藤公雄（1999）『スポーツとジェンダー』井上俊・亀山佳明（編）スポーツ文化を学ぶ人のために．世界思想社 pp114-129.

6) 飯田貴子（2003）「新聞報道における女性競技者のジェンダー化」『スポーツとジェンダー研究』1，日本スポーツとジェンダー学会.

7) 谷口雅子（1998）：スポーツにおける規範の形態とジェンダー．スポーツ社会学研究 Vol. 6　p58-69，127.

8) Caroline Chimot（2010），Becoming a man while playing a female sport: The construction of masculine identity in boys doing rhythmic gymnastics, International Review for the Sociology of Sport December 2010 vol.45 no, 4 436-456

9) Teuro,C (2014),Gender stereotypes as a determinant of participation in sports in childhood, Science & sports Oct2014 spplement,vol29. pS20

10) 伊藤公雄（2006）：「ジェンダーで学ぶ社会学」世界思想社; 新版.

11) 井谷恵子（2003）：「女性体育教師への面接調査からみた学校体育のジェンダー・サブカルチャー」『スポーツとジェンダー研究』１：28-39.

12) 飯田（2011）性的マイノリティのスポーツ参加―学校におけるスポーツ経験についての調査から―．日本スポーツとジェンダー学会 Vol 9 .

13) 井谷恵子（2001）：井谷恵子・田原淳子編著『目で見る女性スポーツ白書』　大修館書店.

14) 飯田貴子（2004）「体力観の形成とジェンダーに関する調査研究」『スポーツとジェンダー研究』２：31-42.

15) 谷口雅子（2003）：スポーツにおけるジェンダーの生産と再生産―明治・大正期を

てがかりに―．スポーツ社会学研究 Vol.11 p75-86,152.

16) 飯田（2006）:スポーツ報道における女性競技者のジェンダー化

17) 佐野（2004）飯田貴子，井谷惠子 編著(2004).『スポーツ・ジェンダー学への招待』. 第1版．東京．明石出版．pp185-192.

18) 吉川（2004）：飯田貴子，井谷惠子 編著.『スポーツ・ジェンダー学への招待』. 第1版．東京．明石出版. pp91-99.

19) 山口泰雄（1998）：池田勝，守能信次 編　講座・スポーツの社会科学1　スポーツの社会学．第1版．東京．株式会社　杏林書院.

20) 山口泰雄（1996）：運動・スポーツの阻害因子と対策，臨床スポーツ医学13（11）：1221-1226.

21) エリクソン（2015）Erik H. Erikson. Identity AND THE Life Cycle アイデンティティとライフサイクル．西平直・中島由恵訳(2015). 第4版．東京．株式会社　誠信書房.

22) Kenyon, G.S. & McPherson, B.D.(1973)：" Becoming Involvement in Physical Activity and Sport: A Process of Socialization." pp303-332 in G.L. Rarick (ed.), Physical Activity: Human Growth and Development. N.Y.: Academic Press.

23) 山口泰雄編（1996）：健康・スポーツの社会学．建帛社.

24) 川辺光（1981）：わが国一流競技者の「スポーツへの社会化」に関する研究：その1．直接スポーツ参与に影響をおよぼす社会的要因分析．東京外国語大学論集 no.31p.149-173.

25) 山口泰雄，池田勝（1987）：スポーツの社会化，体育の科学37（2）142-148

26) 海老原修，横山文人，宮下充正（1989）：スポーツ的社会化における相互的影響の検証．横浜国立大学人文紀要．第一類，哲学・社会科学35，99-110.

27) 久保和之，柳承辰，守能信次（2015）：マイナー競技種目への社会化－実業団ホッケー選手に着目して－．中京大学体育学論叢．38-2,37-43.

28) 山田泰行(2009)：大学生競技者に生起するネガティブ・スピルオーバーと抑うつの関連性．順天堂医学．55，pp.502~510.

29) Goode WJ (1960)：A theory of role strain. American Sociological-Review, 25:483~496

30) Sieber SD (1974): Toward a theory of role accumulation. American Sociological

Review, 39:567~578.

31) 野田光太郎，泰美香子（2015）:男子新体操研究の概観と人文社会科学領域における研究の展望，花園大学文学部研究紀要　花園大学文学部研究紀要（47), 95-113. 花園大学文学部

32) Otake Tomoko(2013)：'Image-Flip for Male Rhythmic Gymnasts,'　McClatchy Tribune Business News, August 18, 2013.

33) Reekie Thomas(2008): 'Equality? Having it both ways? Where is men's-synchronized swimming? Or rhythmic gymnastics?' The Vancouver Sun, January 29, 2008.

34) Chimot and Louveau（2010）: Becoming a man while playing a female sport: The construction of masculine identity in boys doing rhythmic gymnastics

35) Piroska Beki and Andrea Gal(2013): Rhythmic Gymnastics vs. Boxing: Gender Stereotypes From the Two Poles of Female Sport.

36) Kamberidou, Irene, Tsopani, Despina, Dallas, George, and Patsantaras, Nikolaos, (2009): 'A Question of Identity and Equality in Sports: Men' s Participation in Men'sRhythmic Gymnastics,' Nebula, 6(4), 220-237

37) 中央競技団体現状調査 2014 笹川スポーツ財団（2015）pp3-10.

38) 公益財団法人全国高等学校体育連盟ホームページ，統計資料，平成 28 年度. http://www.zen-koutairen.com/pdf/reg-28nen.pdf（2017.1.31 アクセス）

39) スポーツ白書 2012 笹川スポーツ財団(2012). 青少年のスポーツライフ・データ 2012−10 代のスポーツライフに関する調査報告書−. 東京. 笹川スポーツ財団 pp72-102

40) 文部科学省：運動・能力調査,平成 26 年度. http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001077239&cycode=0（2017.2.6 アクセス）

Factors of boys 'high school students' participation in gender sports

Akihiro Nogawa

ABSTRACT

In recent years, sports such as boxing, rugby, judo, and soccer -- historically regarded as male-dominated sports -- have seen remarkable female participation increases (Saiki, 1997). At sporting events, sports are divided into "masculine" events such boxing, and "feminine" sports such rhythmic gymnastics (Saiki, 1997). The term gender sports has been coined to describe this such division in athletics. Socialization research has advanced, leading to a better understanding of how this gender sports division affects women in sports. Excellent research on this topic from overseas includes research done by Caroline (2010) and Tuero (2014). On the other hand, there is currently very little socialization research available regarding this division and how it affects men in sports. Therefore, it is necessary to gather basic data on gender minorities in sports in order to grasp the current conditions and their effects.

This research seeks to investigate gender disparity in sports by gathering basic data on men participating in this so-called gender sports division. This investigation will delve into this topic in the frame of reference of men being a gender minority in certain sports, and look at the participation of high school boys in gender sports.

This research consisted of sending out survey questionnaires by mail to high school boys' rhythmic gymnastics and aerobic clubs. The survey covered items such as personal attributes, sports participation history, socialization environment, influential people, reasons for starting in their respective sport, and the perceived charm/allure of their sport.

The results of this study, the first question analyzed was regarding whom the competitors saw as influential people in their lives. Interestingly, the majority of

competitors stated that the person they regarded as influential or significant in their lives from early childhood until fourth to sixth grade was not a parent of the same sex, but instead their mothers. Next, it became clear that siblings of the same sex had an influence, which differed from previous studies. Post junior high school, participants answered that figures such as club leaders, extracurricular leaders, and sports club peers. These results strongly supported previous research done by Kubo(2015). The influence of such club-related figures became especially clear in high school students in particular.

Two types of classification of sports participation history were classified as outflow/spillover 8.0% (n = 19) and transfer 92.0% (n = 218). Further, in the Transfer the sample considered Resocialization has revealed the presence 6.8% (n = 16). In addition, it was suggested that it was necessary to change the timing of entering the junior high school from the elementary school set as the school term in which the initial spillover occurred to the time of entering from junior high school to high school. From these results, it was concluded that athletic activities in middle school and high school have an influence on gender division in sports. As for men's rhythmic gymnastics and aerobics, the number of samples classified as spillover was a small number, and transfer accounted for a high proportion, as was the case in Kubo et al. (2015).

In conclusion, this survey revealed the participation history of gender in sports, participation factors of gender and sports, and the participation process. However, it was not clear in this survey whether spillover and Transfer occurring in the process of participating in gender and sports are positive turning or negative turning. Therefore, it is necessary to conduct further surveys in order to obtain more detailed data.

＜ 付 録 資 料 ＞

資料１　質問紙

Ⅰ．あなたのスポーツ参加歴についてお答えください。

1．各年齢期に主に参加されてきたスポーツ種目の番号を2つまで記入してください。（複数回答可）

年齢期	幼稚園/保育園	小　学 1－3年生	小　学 4－6年生	中　学 1－3年生	高　校 1年生
参加種目					

①新体操　②器械体操　③サッカー　④野球　⑤水泳　⑥卓球　⑦バスケットボール
⑧柔道　⑨剣道　⑩空手　⑪バドミントン　⑫ダンス　⑬バレーボール
⑭やっていない　⑮その他（　　）

2．各年齢期に所属されてきた場所または団体の番号を2つまで記入してください。（複数回答可）

年齢期	幼稚園/保育園	小　学 1－3年生	小　学 4－6年生	中　学 1－3年生	高　校 1年生
参加種目					

①地域のスポーツ少年団　②民間の体操クラブ　③民間の新体操クラブ　④スイミングスクール
⑤学校の部活動　⑥所属いていない　⑦その他（具体的に：　　）

3．各年齢期においてあなたのスポーツ参加に最も影響力の強かった人の番号を1つ記入してください。

年齢期	幼稚園/保育園	小　学 1－3年生	小　学 4－6年生	中　学 1－3年生	高　校 1年生
参加種目					

① 父親　②母親　③兄弟　④姉妹　⑤親戚（いとこ）　⑥部活の指導者　⑦クラブ・サークルの指導者
⑧担任教師　⑨部活仲間　⑩先輩　⑪部活以外の友人（含む恋人）　⑫特にいない
⑬その他（　　）

4．あなたが男子新体操競技を本格的に始めた理由で**当てはまる項目全て**に○を付けてください。(複数回答可)

①父親の勧め　②母親の勧め　③兄弟の勧め　④姉妹の勧め　⑤部活動の指導者の勧め　⑥外部指導者の勧め ⑦部活仲間の勧め　⑧先輩の勧め　⑨新体操からの勧誘　⑩器械体操からの転向　⑪他の競技からの転向 ⑫メディア（テレビ・YouTube）を見て　⑬漫画を見て　⑭その他（　　）

5．あなたにとって男子新体操競技の魅力について以下の項目で当てはまる番号に○を付けてください。

	とても同意する	同意する	少し同意する	あまり同意しない	同意しない	全く同意しない
男性らしいダイナミックな演技/動作	6	5	4	3	2	1
4種目の手具操作の面白さ	6	5	4	3	2	1
バク転、バク宙などのタンブリング動作	6	5	4	3	2	1
衣装の華やかさ	6	5	4	3	2	1
伴奏に合わせた演技の面白さ	6	5	4	3	2	1
繊細な演技力の追求	6	5	4	3	2	1
グループ演技での協働作業の楽しさ	6	5	4	3	2	1
男性らしい迫力とスピード感のある演技	6	5	4	3	2	1

Ⅱ．新体操競技におけるあなたの現在の活動状況についてお答えください。

1．あなたが現在の高校に進学される際、何を最も重視されましたか。宛てはまる番号に○を付けてください。

①新体操のレベル　②器械体操のレベル　③指導者のレベル　④部活仲間　⑤部活の上級生 **⑥特待生制度　⑦大学進学率　⑧就職先　⑨その他（　　）**

2．1週間の練習回数と時間　　週（　　）日　1回平均（　　）時間

3．高校入学後の大会出場回数　　**＜国体は現在休止中です＞**

大会レベル	全日本	国　体	インターハイ	ブロック大会
出場回数				

4．新体操競技を続けている中で大きなケガ（2週間以上）や傷害をされた項目全てに○を付けてください。

① 骨 折	② 脱 臼	③ ねんざ	④ 腰 痛	⑤ 打 撲	⑥ 靭帯損傷	⑦ 肉離れ
⑧ 突き指	⑨ 脳振とう	⑩ その他 （　　）				

5．新体操競技にかかる年間費用をお答えください。

衣装代、手具の購入費、遠征費等の年間経費など　　総額：約（　　）万円

6．男子新体操選手が家族や高校および協会に希望するサポートをお答えください。

	非常に希望する	希望する	少し希望する	あまり希望しない	希望しない	全く希望しない
1 家族の経済的なサポート	6	5	4	3	2	1
2 家族の日常生活のサポート	6	5	4	3	2	1
3 家族の食事（栄養）面のサポート	6	5	4	3	2	1
4 学校からの施設面のサポート	6	5	4	3	2	1
5 学校からの指導面のサポート	6	5	4	3	2	1
6 学校からの進路面のサポート	6	5	4	3	2	1
7 学校からの経済的なサポート	6	5	4	3	2	1
8 新体操協会からの施設面のサポート	6	5	4	3	2	1
9 新体操協会からの経済的なサポート	6	5	4	3	2	1
10 新体操協会からの指導面のサポート	6	5	4	3	2	1

Ⅲ．男子新体操競技をより広く普及・振興するための方策として、下記の提案にどの程度同意されますか。当てはまる番号に○を付けてください。

		とても同意する	同意する	少し同意する	あまり同意せず	同意しない	全く同意しない
1	女子新体操競技と混同されやすいので競技**名称を変更**すべき	6	5	4	3	2	1
2	**個人演技を廃止**し、シンクロ競技のようにデュエットと団体演技にすべき	6	5	4	3	2	1
3	個人種目の手具は、**より男性的な道具に変更**すべき	6	5	4	3	2	1
4	衣装の華やかさは女性競技を連想させるので、器械体操のような**シンプルな衣装**にすべき	6	5	4	3	2	1
5	伴奏に合わせてバレエの群舞のように**芸術性を追求**すべき	6	5	4	3	2	1
6	芸術性よりも**男性らしい力強さ**とタンブリングを採点対象とすべき	6	5	4	3	2	1
7	テレビや漫画などの**メディア**を通して男子新体操の魅力を広く伝えるべき	6	5	4	3	2	1
8	個人演技の手具を男女共通に統一して、**男女混合競技**とすべき	6	5	4	3	2	1
9	10点満点の**採点方式**を器械体操のように上限を取り払うべき	6	5	4	3	2	1
10	男子新体操競技の**国際大会を倍増**して日本式男子新体操を普及すべき	6	5	4	3	2	1

Ⅳ．　あなたの将来の予定・計画をおしえてください。下記の項目からひとつ選んで、当てはまる番号に○を付けてください。

① 進学して競技を続ける	② 進学して別の競技に挑戦する	③ 進学しても競技は続けない
④ 就職して競技を続ける	⑤ 就職して別の競技に挑戦する	⑥ 就職したら競技は続けない

Ⅴ．あなたご自身についておしえてください。

学　年	① 1年生　② 2年生　③ 3年生	体　格	身長　　cm　体重　　kg
居住地域	① 北海道　② 東　北　③ 北　陸　④ 関　東　⑤ 東　海　⑥ 中　部　⑦ 近　畿 ⑧ 中　国　⑨ 四　国　⑩九州・沖縄		
現在のお住まい	① 自宅　② 合宿所　③ その他	同居のご家族全てに○	① 父　② 母　③ 兄　④ 弟　⑤ 姉 ⑥ 妹　⑦ 祖父　⑧ 祖母　⑨ その他

今後のインタビュー調査へのご協力のお願い

本調査では、今後インタビュー調査による質的調査を実施し、男子新体操に関する内容のお話を伺いたいと思っています。ご協力いただける方は後日ご連絡させていただきますので、下記の欄へご記入いただきますようお願い申し上げます。

お名前	
メールアドレス	

質問は以上で終了です。今一度、記入漏れがないかご確認ください。
アンケートにご協力いただきまして、誠にありがとうございました。

順天堂大学 大学院スポーツ健康科学研究科 工藤研究室
博士前期課程 2 年　野川暁弘
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1－1　℡ 0476-98-1001㈹